
シのないピアノ

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シのないピアノ

【ZPDF】

Z0237D

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

花梨は、ピアニストを目指していた中学三年生。しかし、事故で右指の薬指の神経が通わなくなり、ピアノでの推薦入学を敢え無く断念し、ピアノに関する全ての物を排除し、聞きたくも無い高校受験の相談を進め無くてはならなくなつた。そんな時、花梨を魅了する歌声の少年、高坂と出会う。花梨の進むべき道は?切なく、そして嬉しいお話です。心に勇気と初恋の甘酸っぱさが伝われば嬉しいです。

私の右薬指は、神経が通つていません
十三歳の春にピアニストになる夢を諦めました

今は十五歳の秋

進路指導の先生の言葉がウザくて仕方ない
誰かに生きることの喜びを下さい

誰かにそう望んでも返つてくる言葉はただの受け売りの言葉
私はそんな言葉なんかの必要じや無いのに

神様なんて居ないとそう半ばやけになつて生きていた

……それが現実

秋の静けさの中、一段と寒くなつてきた深夜の商店街を、運悪く
パンクしてしまつた自転車を一人の少女が押して歩いていた。

普段この場所を通ると、バカ騒ぎした学生や、酔っ払つた中年サ
ラリーマンを目にして嫌な気分になる。だから、自転車で何も見な
かつたことにしてスー^トと走り去るのが最善の行為だと南花梨は知
つていた。

しかし、この時たまたまこの状況が生涯かけがえの無い出会いに
繋がるとは、夢にも思つていなかつたのである。

響き渡る澄んだテノールの歌声が、ちょうどその前を通り過ぎる
時耳に焼きつく。それが何故だか妙に心に落ち着くから不思議であ
つた。オケの無いその歌声は、花梨の心を捉えるのには余りにも質
素であつたが、その隠された情熱を感じ取つたのである。

そつと立ち止まり五人ほどの取り巻きを横目に気になるその人物
を見た。そこには自分とさほど年齢が違わないであろう少年が、
一人歌つている。

ちょうどライトアップされているその場所だから分かつたが、金
色に染め上げている軽やかな髪が印象的であった。

不良？

ちょっと敬遠したい類の人物かもしれないとは思ったが、何しろ、これだけ花梨を魅了する歌声に出会つたことは初めてだつた為に、その場に釘付けにされていた。

どのくらい時間が経つたのかも忘れる程に、その場を離れること
が出来なかつたが、その少年がその場を立ち去るつとした時ハツと
我に返り自宅に向かつこととなつた。

帰り際、胸がドキドキしている自分に気がつき、その気持ちを抑えることが困難な自分と向き合うことが難しかった。

それからと/orもの、その場所に訪れては、少し離れた所で歌声を聴くことが日課になっていた。

ピアノに関する物を排除し、全ての音楽番組、雑誌、CD類を遮断して生活するようになった花梨にとって、このことは一つの大事件でもあった。何がこんなに自分をときめかすのだろうか？そんな謎解きは、必要であろうか？

だけど、何かが自分をせつつかせている事だけは間違いなかつた。だから、夜あの場所を訪れるのは良い傾向であったと自覚するようになつた。

うるさい進路指導の先生の言葉が耳から抜けていくだけ抜けて行った放課後。一人、自らの教室に向かつた。

ピアノで推薦入学が決まっていたようなものの、結局はその話も無くなつた今、普通に進学しなくては成らなくなつた為、その進学すべき学校を選ばなければならなくなつた。

成績、素行共に悪くない。中の上といった花梨は、一般的な先生が望むような学校を選ぶ事だって可能ではあった。

しかし、決まらない。何処に行きたいなんてそんな事今更言われ

ても、考えることなんて出来はしない。ムシャクシャして仕方ないから、

「先生が決めてください！」

それだけ言い残し、その場を離れた。

元来、大人しく反抗もしたこともない花梨であつたため、担当の先生の目は驚きのために見開かれていた。それを横目に、進路指導質のドアをピシャリと閉めてきた。

「清々した」

花梨は少し痛む心を落ち着かせながら廊下を歩いて帰宅する為に教室のドアを開けた。

「？」

開けた瞬間、目に飛び込んできたのは、誰も居なくなっているはずであろう教室の或る一点。自らの席に、うつ伏して寝ている男子生徒が居ることに気がつき面食らってしまった。

「クラスの子じゃ無いよね……」

こんなド派手なナリをした人物は知らない。しかし、起こして良いものであるうか？難癖つけられて、後で痛い目にあうのは嫌だしなど、考えを巡らせてみる。

仕方なく、花梨は隣の席に座つて目を覚ますのを待つてみることにした。

三十分経過……

一時間経過……

一時間経過……

「いい加減起きてよ！」

荷物をまとめることが出来なくて、苛立つ心を抑えることが出来無くなつたため、隣の席の子が残していつた机の中のノートをメガフォン状態にしてその学生の耳元で叫んでいた。しかし、一向に起きる気配が無い。

「火事だー！」

それでもかといわんばかりに大声で叫んでみた。

「あん?……火事?？」

ちょっとだけ覚醒に近づいたのか?しかし、モゾツと動いただけでなにやらムニヤムニヤ言つているだけである。

「こいつ……絶対焼け死ぬタイプだわ」

呆れるしかすること無くて再び椅子に腰を下ろす。そんな時、

「ふあー、よう寝たー」

大欠伸をして上方に腕を伸ばしている。

「あ……」

驚いた。その学生が、毎夜聴きに行っている商店街の少年であることに気がついたからであつた。

一言漏らしたその声で気が付いたのか?少年は花梨のほうを見て、「勘弁。寝ちゃつてたわ」

歌声と変わらない甘いテノールの声。驚きの余り花梨は言葉を失つていた。

「こここの席ええわな。ほらつ、隣の校舎のちゅうじいの教室のまん前、音楽室なんね。風向きもええ具合やつてん。ピアノの音が心地よつて思わず寝てしまつたわ」

照れ隠しのように笑う顔が余りに子供じみて思わず見入つてしまふ。ピアノと言う単語を不愉快とも思うことなく。

一年生の名札のプレートが胸に付いているのに気が付き、

「高坂君……つて言つんだ」

思わず呟く。

「そうやけど……あ~こんな時間なんやん!」

教卓の上の時計を見て慌て始めた。

「お姉さん悪いわ~こんな時間まで待たせたん? そうやこれ、お詫びなんだけど、ぜひ来たつてな?」

ポケットから取り出す一枚の紙切れ。

「ライブハウスつて訳やないんやけど、ここで俺歌つてんよ。サー

ビスも何もないんやけどええ仕事してますよつて！」

それだけ言い残すと、大慌てで去つて行つた。それはまるで嵐のようで、花梨は一言も言い返すことが出来なかつたのである。

手元に残された紙切れを見る花梨。

『高坂英二コンサートチケット』

手書きで書かれた自作のチケット。地図もサインペンで書かれた定規も使ってない簡単なモノ。思わず噴き出してしまつた。

「毎日通つてるわよ」

ひよんな所で出くわせてしまつた、この高坂というキャラクターに、今日有つた不愉快なことなんか全てすつ飛ばしてしまつていた。

「来てくれたん？」

高坂は、取り巻きの女の子達を潜り抜けて子犬のように駆け出してきた。

「チケットくれたから」

思い出して噴き出しそうになるのを、花梨は必死で堪えていた。

「嬉しいわ。ここ空けとるだけ、ここで聴いていいってな」

取り巻きの女の子達が一瞬花梨に向けられる。何か言いたそうなのが手にとつて分かつた。この子達にしてみれば、高坂は一種のアイドルなのであらう。その人物と親しく話すとなると、敵として見られるのは当然だ。

アハハハハ……乾いた笑みがこみ上げてくる。

「歌を聴きに来ただけだから」

そう一言言えたらいいが、そんなことはいう氣にならない。ぐだらなすぎて……

こんな近くで歌を聴くのは初めてであつた。いつもは遠巻きに聴いていたから。

しかし、なんて楽しそうに歌つんだろう？

そう感じるだけの、表情に豊かさをこの高坂は持ち合わせている。素直な気持ちをそのまま歌い上げることが出来るのは、天性の素

質なのかもしれない？

花梨は目を閉じて聴いてみた。溢れる思いの篠つた気持ちの良い声。その上に、決して間違えることの無い音程。絶対音感の耳を持つている今まで言われたことのある花梨の耳にその声は本当に心地よかつた。

音楽は無限なんだと思えるほどに。

「どうやつてん？俺の歌？」

終わつた後、花梨を呼び止めて高坂は訊いて来た。

「うん。すごく良かつたよー。」

いつも聴いているとは言えないから、素直な感想を言つた。

「ほんま？嬉しいなあ」

一コツとあどけなく笑つてる辺りは、まだまだ一年生らしい表情で、花梨は安心した。

歌つているときは、少し大人びて見えるから。

「また来たつてな。楽しみにしとるだけ」

そう言つて別れた。

一人でも多くの人を集めつもりなんだろうか？この時はそう思つていた花梨であった。

次の日も、次の日も。花梨はこの場所を訪れる。

いつの間にか、常連になつて高坂と逢う機会は多くなつていつた。それが、恋人同士のそれではないかと疑いの目を向けられ始めても、当の本人たちは関係なかつた。

気の合つ友人。その言葉が似合つ。花梨はそう感じていたから。

「お姉さんの指、綺麗やな」

そんな会話まで交わす程に親しくなつた頃には、学校の登下校まで一緒にするようになつていた。そして、近くのファーストフードに立ち寄つたのが話しおきつかけとなる。

「綺麗？そつ……でもね、私のこの右薬指はもう動かないの」

自らの右手の指を撫でながら、花梨は別段憎しみも、苛立ちも込める」となくサラリと言つてのけたつもりだった。しかし、高坂は少し傷ついたかのような目で花梨を見詰めた。

「そ、うなんや……知らなんだ。もつ……ピアノ弾けんのやね」「え？」

何故知つているんだろう？花梨の頭は真っ白になつた。

「私の事……知つてたの？」

高坂は少し考えるようにして、

「うん。知つとつた。俺が歌始めよう思つたんお姉さんの影響やもん」

高坂は、全てのことを花梨に話す決心でも付いたかのよひに、口を開く。

「俺が十歳の時、従姉妹がピアノの発表会があるとかで、たまたま東京に来ていた俺を連れてその会場に行つたまでは良かつたんやけど、まさか、天才いわれる子が出るとまでは聞かされてなかつたてんな」

一口、「コーラーをストローで啜つた。

「始めは、従姉妹が出たらそれで興味なかつたんや。持ち物チェックを逃れて、ダビング用のテープ持ち込んで、『記念に録つておいてね』言われてたからそれさえ終われば後は興味なかつたし。やら、終わつた後ウトウトして居眠りしそうになつた時やつた。静かなざわめきが起こつて、何ややろ思つたわ。出てきたはずの女の子が蹠いてこけたみたいなん」

花梨の中にある、そのときの記憶が蘇つた。

「どんくさ……思たんやけど、その後、この俺でもほかの子とは全く違つと判る程綺麗で力強いピアノの音を聴いて痺れたんよ。俺もこんな風にピアノが弾ければなで」

思い出す。緊張感と躍動する気持ち。花梨にとつたらただの発表会じやなかつた。一部の観覧席に居る人々のことを知つていたから。

それは、ピアニストになる為の階段の一つだった。認められるかどうか？それがあのときの状況だったのである。

「俺、ピアノ始めたんよ。そのあと直ぐ。でも、俺には才能ないん分かってん。やけどソルフェージュだけは褒められて、歌に向したんやね……歌手にならう思つて東京まで出てきたん……お姉さん追っかけて」

そういう経緯なのかと花梨は初めて知った。自分に近づいてきたのは全て、前段階があつたから……でも何故そこまで？冷静に考えてみれば、歌手とピアノは関係ないではないか？

「で、私がピアノ弾けなかつたら、もう必要ない？」

花梨は何故だか落胆に近い物を感じていた。結局ピアノが弾けない自分なんて必要とはされないであらう。

「そう言つ事言つん？お姉さんは、ピアノだけが音楽やつて思つとるん？俺はちやう思つよ。楽器が何であるうと、音楽は出来るんちやうかな？それともお姉さんの音楽つてそう簡単に割り切れる物なん？」

高坂は、ジッと花梨を見詰めていた。

花梨は考えていた。ピアノが好きだから、ピアノが弾けなくなつたから、全てが終わつた。つてそう考えてきた。でも、こいついう言葉を返してくれた者は今まで居なかつた。

私はピアノが好き。鍵盤を叩くのが好きだつた。でもそれだけだつたのか？音楽という広い世界を感じたことは無かつたのか？考えると不思議と心が揺れた。

私は、音楽が好きだつたからその中の一部。ピアノを選んだに過ぎないのではなかろうか？だから、音楽に関する物から遠ざかつた。そして全てを切り離した。

なのに、高坂の歌を聴いてから、再び音楽の世界を垣間見ていたのではなかろうか？

「分からぬ……私の出来る音楽つて何？」

「方法ならいくらでもあるんとちやう？」

高坂は上げ列ねた。ギターに、バイオリン、ドラムに、声、……
その中に、自分が興味を引く物つて何だろ？…そつ考えて行くと
色々道が広がるよう感じられる。

「俺は、声を楽器やと思つとる。これは、誰にも譲ることがでけへ
んもの。お姉さん？もし、ホンマに音楽やりたい思つてるんやつた
ら、ピアノにこだわることないんぢやつやろか？俺そつ思つわ」

高坂はニコッと笑つた。

あんなに真面目に話していたのに、気が変わつたんだろ？…
か？それとも？

「俺は、お姉さんに音楽続けてもらいたいんよ。じゃないと、こ
にある意味が無いもん」

それはどういう意味なんだろ？…花梨には分からなかつた。
「私が音楽続ける」ことに何か意味でも有るの？」

その答えを、高坂は声を上げずに笑つて誤魔化した。

「ちょっと…何よその意味ありげな笑いは！」

変だな？何でこんなにムキになるんだろ？…花梨がそう思つた頃
には、高坂は立ち上がつていた。

「お姉さん。この本あげるわ」

高坂は鞄から一冊の本を取り出した。

「ギター教本？」

「右手の指は関係ないから、ギター弾いてみいや……あつとはまる
と思うわ」

高坂は楽しそうに片付け始めた。

「ギター……ね」

それは全く未知の世界であつた。

花梨は少し考えて、その本を鞄に仕舞い込むと、高坂を追う様に
して、その場を立ち去つた。

花梨は早速帰宅して、ギター教本片手に、父が昔使つていたフォ
ークギターを引っ張り出しあき鳴らしてみた。

「ふーん。これが開放弦で」

凄く新鮮な感じだつた。

ピアノの音とは全く異なつてゐるが、確かに音が鳴つてゐる。そして、

「ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ……」

感動した。『シ』が弾ける……

右指でピアノを引こうとしても、運指法で弾けなかつた音。

しかし、そのギターは暫く使つていなかつた為か少しずつ音が狂つてゐることが分かつた。花梨は、調音の仕方を教本を見ながらこなしていく。そのことをもが、今の花梨にとって大事なことのように思われた。

こんなに楽しいと思つのは久しぶりのことに感じられる。瞬く間に、コードまで覚えて簡単な曲を弾くことが出来るようになつた。

初めは、左指で押さえる弦の強さに慣れずに、痛い思いをしたが、それはピアノが弾けなくなつた時に比べれば困難なことではなかつた。

それからは、本屋に通い詰めてバンドスコアの本を買い求めていた。

そして、いろんな曲を弾けるようになる頃には、そのギターを片手に、高坂のいる商店街に通い始めたのである。

「お姉さん? めちゃ早いんとちゅう?」

高坂は笑つてそう言った。

「そなのかしら? でも面白いのよ」

花梨の心は潤つていた。ピアノが無くとも私にはこれがある。そう思えることが出来たから。

「ねえ、いつも高坂が歌つて いる曲弾いてあげる」

伴奏する楽しみが出来た。曲に合わせて高坂が歌う。それが楽しかつた。

今の自分にこんな気持ちをくれたのは、他の誰でもない、高坂だつ

たから。

「目的は、これだけじゃないんよ、お姉さん？」

なぜかぶつきらぼうに高坂は答えていた。

その理由が解らなくて、花梨は小首を傾げたが、何にせよ、道が見つかったと思えた。

一人が奏で出す音楽は瞬く間に近所の商店街を活気付けた。来る日も来る日も立ち寄る者達は後を絶たない。

いつしか地方記事にも軽く取り上げられていた。

「俺ら有名人？」

軽く微笑む高坂の顔はほころんでいた。

「これくらいで、有名になつたなんて思つのは筋違いよ！ もうどビッグに成らなきや！」

花梨は思つていた。もつと大きなことひでコンサートをしたいと。

そして、いつしか時は流れ卒業式を迎える時期になつた。

花梨は、T高校に入る決心を固めて入試に挑み、後は結果を待つだけだつた。

結局学校は何処でも良かつた。ただ、部活動としてバンド活動が出来る所を選んだ。進路相談の先生のうるさい攻撃にも耐えて決めた高校である。花梨にとつて、満足がいく学校生活が送れれば何も文句を言う事など無かつたからだ。

式後、担任の先生との別れを惜しむことなく学校を後にする。音楽を通して仲良くなつた友人くらいしか別れを惜しむことは無かつた分、花梨にとつて後腐れの無い学校だつたといつて良い。そんな花梨が校門をくぐつた時、

「お姉さん」

呼び止められて振り返る。直ぐにそれが高坂だと気が付いた。

「今まで経つても、お姉さんだもんね」

私の名前知つていてるのかしら？ と呆れる。

「花梨ちゃん呼ばれたい？」

花梨はブツと吹きだした。可笑しい。

「卒業ねんな……」

高坂はちょっと寂しそうに笑っていた。

「卒業しても、高坂とは嫌つて言つほど会えるでしょ？ 何も今生の別れじや無いんだから」

花梨は、クスリと笑つた。

「高坂のおかげで私の道が見つかつた。凄く感謝してる」

『忘れないよ』

と一言言つたかつたが、またいつでも会えるんだしと、言葉を切つた。

「あんなあ俺、大阪に帰るねん」

「え？」

どうして？と問いかけたかつたが、先に高坂が切り出した。

「お姉さんと逢えて話でけて良かつたわ。ええ思い出がけたもん」

どう言つ事？歌手になるんじや？

わけが解らなくて、頭が混乱してくる。

「俺、あつちの病院に用があるん。実は心臓に欠陥があつてな、手術せなあかんのよ……確率は低くてな、三十%有ればええほうなん。でもせなあかんのやて……めんどいことやなあ～」

そんなこと聞いたことなかつた。私は高坂の何を知つていたんだろ？今までのことが、全て色褪せていく。

「もう、じつには帰つて来れないの？」

高坂は、二口シと笑つて、

「帰つてきたいわ。でもそれは全て手術次第なんよ……祈つててや。ほなもう行かんと時間に間に合わんから」

去ろうとする高坂の腕を、花梨は思わず引っ張つていた。

「なん？」

「あ……連絡先くらい教えていきなさいよ！ 私、高坂の声に惚れてるんだから！」

訳が解らない事言つていいと思つた。だけど、それ以上言つ葉が見つからなくて……

「搜し出してえな。俺がお姉さん搜し出したみたいに……」

高坂の腕がスルリと離れていく。そして駆け出していった。遠ざかっていく高坂の後姿。

心臓に欠陥？嘘でしょ？あんなに走つているのに……

花梨は心の中で呟くと同時に今ぐぐつてきた校門の中に再び足を向けた。

高坂の実家は直ぐにわかつた。学校の生徒名簿を調べるといとも簡単に。

「高坂君は、体育は全て欠席してたのよ」

高坂の担任から聞かされた。

高坂の言つたことは本当だつたんだ。と、初めてここで知つた自分を恥じた。

数少ない友人の一人の筈が、実はそうじやなかつた？そう呼ぶべきじやなかつたんだと知らしめられた時、自己嫌悪に陥りそうになつた。

「手術……するそうですね？」

「ええ、三日後だそうよ」

先生は知つてゐるのに私は知らない。

とにかく住所を書き留めて花梨は足早に学校を去つた。このままにしておける訳が無い。

果たして迷惑なんだろ？私は迷惑だつた？

高坂が居てくれたから今の私が居る。居なかつたら、いつまでも自分を見つけられずにいたのではなかろ？

「決めた！」

花梨は試験の発表を待たずに、次の日、家族に書置きを残したまま家を飛び出していた。

「高坂君？ 気分はどう？」

看護婦が手術前の個室で声を掛ける。

「いたつて気分ええねん。さっさと始めてや」

「もう少し待つてね。あと少しだけやから」

看護婦は近くの時計の針を気に掛けているようであった。

「なんや？ 落ち着かんみたいやけど？」

「ん？ ちょっとね……あつ」

突然バタバタと駆け込んでくる足音が聞こえてきた。

「何や？ ここ病院やろ？ つるさしてええん？」

「バン！」と開け放たれる扉。そこに立っていたのは花梨であった。

「な？ どないしたんや、お姉さん！？」

乱れる息を整えることを先決だとも思わず、花梨は、ズカズカと部屋に入つてくる。

「搜せと言つたのは高坂でしょ！ 来たわよ！ このままよならなんて許さないからね！ 気合入れて帰つてきなさい！ 私は高坂が必要なんだから！ 以上！」

高坂は、目をパチクリとさせながら、花梨を暫くの間見ていた。しかし、そんな中いつもの笑顔で笑い返してくる。

「かんなな……お姉さんには……あん時とはまつたく逆やん……帰つてきたらちやんと名前で呼ぶから待つててや」

高坂は、右手を差し出した。

「バカ……」

花梨がその手を右手で受け止めると、

「やっぱ、お姉さんの指綺麗やわ」とニコッと笑う。

「それでは、手術の時間になりますから、移動します」

時間を確認した一人の看護婦が、カラカラとベッドを移動し始めた。

る。

高坂は、見えなくなるまで花梨に手を振っていた。そしてその姿をいつまでも花梨は見送った。

高校卒業と同時に花梨は、高校時に知り合った気の合ひ仲間とロックバンドを組んで、一年前念願のデビューを果たしていた。そして、今ではそこそこ売れるようになっていた。

「花梨！ 今日このままご飯食べに行くけどどうよ？ 時間空いてる？」ボーカルの有希が、花梨の身支度を待つて控え室の扉の向こうから声を掛けてくる。

「あ、ごめん…… 今田は、これから大阪に行かなきゃいけないの」身支度を終えた花梨は急いで時計を見る。

「あ、前言つてた高坂クンね…… 分かつたよ。でも、明日の夕方にはちゃんと戻つてきてね。歌番組の収録があるんだから」

「うん。分かってる」

花梨はそう言い残すと、足早に控え室を後にした。

「久しぶりね」

あの後、十一時間もの手術を乗り越えることが適わなかつた高坂はそのまま還らぬ人となつた。

花梨は、高坂の実家の母親とは連絡を取り毎年命日のこの日の場所を訪れている。

「何とか私の方はやつてるよ…… バウ～～ンの見晴らしは…… 寂しくない？」

語り返さないただの墓標に向かつて花梨は話しかける。毎年そつだつた。欠かすことの無いこと。

「天国つてさ、どんなところなんだろう？ つていつも思つよ。神様なんて居ないなんて思つていた私だけどさ、少しあ信じてみる気持ちにもなつてる…… 私達出逢え無かつたら、今私はこうやって音楽続けられるなんて思つてないもの」

こみ上げてくる物を振り払いつつ、花梨は言葉を紡いだ。

「今度ね、全国を回るコンサートツアーやることになつたの、凄いでしょ？ その時に一曲だけ、高坂が好きだったあの曲、アンコール

用にカバーで弾くことになつたんだ……」

静かに流れ落ちてくる涙を拭いとる」とも忘れてしまつて、化粧が剥がれ落ちてくる。

「そつちで歌つてよ……私に聴こえるよ」

花梨はそのまま蹲つたまま立ち上がりなかつた。何も考えられない気持ちが心の奥で燻つてゐる。しかし暫くそのままの格好で居ると、不思議な事に、何処かしらかあの曲が流れてきた。

「え？」

振り返る花梨。直ぐ後ろには、高坂の母親がコンパクトラジカセを持つて立つてゐた。

「これな、花梨さんに差し上げるわ」

ラジカセから取り出した一本のテープ。

「英一が残して逝つた、たつた一本のテープですわ。最近になつて出てきたんですけど、私が持つどりより、きっと英一嬉しいんとちやうんや無かるうか思つてなあ」

『歌手になりたいんよ』

と言つた高坂の言葉が蘇る。凄く綺麗なテノールの声。思い出が鮮明すぎて泣けてくる。花梨の涙が流れきるまで何時間も掛かつたが、高坂の母親はそれに付き合つてくれた。

「英一もええ友達に恵まれたもんですわ」

ただそう言つて頭を撫でて笑つてくれた。

帰りの新幹線の中、花梨はそのカセットテープを帰り際に立ち寄つたデパートで買ったカセットウォークマンで聴きながら東京に向かつた。

夕方からのスケジュールも間に合つかどうかと囁く瀬戸際だとうのに、思い出に浸つていた。

テープのラベルには、ボールペンで書かれた『十一歳』の文字。きっと。高坂が十一歳の時に録音した自らのテープなんだつと推測できた。

しかし、隠されていた言葉と曲。花梨がその事に気づいたのはB面の最後であった。

『この曲は俺の大好きなピアノ曲ですわ。そして初恋の人が弾いてくれた最後の曲なんよ』

それは紛れも無く、自ら弾いたあの最後のピアに曲。ぐぐもつた音声の中流れ始める。

「知らなかつた……てのは嘘だつたんだ」

初めから全て知っていたんだ……花梨は高坂の言つた自分の最後の言葉だと言つ事に気が付いた。そして止め処も無く涙が零れ落ちてきた。

『お姉さんの指綺麗やな』

花梨の心の中に蘇つた言葉。

途切れる事無く流れ落ちてくる涙が止められない。全てが一生忘れられない思い出になつていく。

花梨は初めて神様の偉大さに気が付いた気がした。今自分の中に浸み込んで来るこの曲と、高坂の言葉は、自分への戒め。

「一生の願い」これで使っても良い。高坂が、天国で歌つてくれますように……生まれ変わつても、歌つことを忘れさせないで……」

高坂が救つてくれた私は今前を向いて歩いている。

花梨の耳に流れ込んでくるその曲は、東京の新幹線の中、何度も何度も繰り返されていた。

好きだったあの人の歌……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0237d/>

シのないピアノ

2010年10月8日15時47分発行